

【史料1】 全部を町内配給 今後は暴利取締令摘要 闇市の押収物資

既報松江署では二十二日松江市大橋付近の闇市場に対し一斉取締を実施した結果、本署に連行されたもの男女七十八名に上った、そのうち八束郡大野、八束村のものが最も多く、取締られた物資は、イカー四九キロ、カニ一〇五キロ、タコ一キロ、サザエ一八三キロ、アワビ二六キロ、鮮魚六七一キロ、その他赤貝等で、何れも県水産業者に換価処分し町内配給される筈、今回取締を受けたものゝうち五十七名は暴利行為者で、なかには闇市場で買受け闇で転売してゐた業者もあり、また鮮魚の如きは〇公の三倍以内で売るべきを十五倍位の不法価格で売り、赤貝なども産地で一升三円乃至五円で買受け八円乃至九円で売つてゐた者もあり、検挙された全部に対して松江地方裁判所渡部検事、久谷松江署長から厳重に訓戒、今度に限り処分せぬことゝし、今後業者にして継続販売せんとする者は、企業許可令による免許者で協定価格以内で販売することは認めるが、それ以上で販売した者は暴利として取締り、鮮魚の如きも生産漁民にして協定価格以上で売ったものは生産資材の配給を停止、漁業免許も取消すこととし、明朗な販売を実施する。（『島根新聞』一九四六年一月二十四日）

【史料2】 魚求める巷の声 自由販売か統制か

松江殿町第五隣組 一主婦の話

サア、自由販売もいゝですが…昔のやうに沢山の魚が出て自由販売になるのでしたら賛成です。いまのやうな魚の出まわりの状態で自由販売にしたら結局「顔のきく人」はいくらでも魚が入り「顔がきかぬ」ものは、店さきに魚があつても「これはもう売れたものです」といはれていと思ひをせねばならぬではないかと心配します。それから「魚は米とかへるとか漬物でなければいけません」と浦のおかみさん方に大きな顔をされるにきまつてゐます。自由販売にするならば、このやうな不愉快なことがないやう、魚が公平に闇でなく、買へるやうに取締りも厳密にしなければ…まあいまのところ現在の配給制でけっこうです（『島根新聞』1945年10月10日）

【史料3】 闇市場をめぐる松江市会での議論

十九番：大橋南側ノ魚商人ハ私設的市場トシテ価格ハ高イ様デアッタガー面ヨカッタト思フ之ハ闇デアッタ為追払ハレタガソノ時水産業会ガ対抗的ニ安イ値段デヤリ市民ハ喜ンダガ之ガナクナッタ為困ッテキル之ニ対シ市当局ノ考ヘ如何ト質問ス

市長：十九番ノ質問ニ対シ之ハナカナカ表面裏面取締イロイロ複雑シタ關係ガアル之ハ市トシテハドウニモ出来ナイ事デアルガ漁業会関係ト連絡ヲトリ今ノ配給機構ニヨリヤッテモラウベクスル様外ニ途ガナイ旨答フ

十九番：闇ニ対抗シテ水産業会ガ安イ魚ヲ出シタガ之ヲ継続シテ貰ラフ様ニ出来ザルヤニ付質問ス

市長：十九番ノ質問ニ対シ其ノ点ハ我々モ要望シテキルガ理屈通りニ行カナイアノ手コノ手ヲ努力シテキル私個人トシテモ水産業会ニ以来シテキル旨答フ

（「松江市会々議録」昭和 21 年 2 月 14 日『昭和二十一年 市会々議録』）

【史料 4】転落する学童たち

原因は食糧不足と金銭の濫費

また近頃みられる純真な国民学校児童までが悪の道へ転落する危険性が増大したことは注意すべきで学校当局は勿論のこと父兄側でも厳重警戒と指導を必要とする、これ等児童のかうした方向に走る原因はいろいろあるが其の大部分は食糧の不足に起因し、なかには大人の出入する喫茶店、飲食店方面へ出入して買喰ひをする傾向もあり映画への誘惑もあるやうだ、かう云った子供の犯罪手口は前科者とか不心得な大人純が真無垢な子供を使って米、衣類とか靴を各家庭の隙をみて窃取せしめ、大人へ渡した物資の代償として得た金銭或ひは物資の分け前に預った子供たちは自制心のないまゝ無意識のうちに誤った道へ足をふみ込むのである（以下略）

（『島根新聞』昭和二十一年三月二日）

【史料 5】高い店へひじ鉄砲 ヤミ不買に松江城西の婦人連起つ

ヤミのない「明るい正月」をむかえるためには、まず主婦が真ツ先に立つてヤミ追放運動を始めなければならないと、松江城西婦人会ではこのほど各家庭の奥さんたちが結束して申合せを行った、まず高いヤミ値で売る不良商店をなくすために城西管内の各商店から価格とサービスの両面から優良店を選び出し正しい価格のよい店でみんなが買物をする事になり、十五日までに優良、不良各一店ずつ投票、十六日開票の結果によって早速実行にうつす。（以下略）

（『島根新聞』一九四八年十二月十一日）

【史料 6】疎開建物買上価格陳情代表不服 内政部長談

「疎開者に対しては誠に同情に堪へない。疎開は本省の命で急速に実施した結果建物調査については幾分不十分な点はあつたかも知れない。一部には不平不満の人もあるが、空襲を受けた戦災者のことを思へばこの不満も解決出来ることと思ふ。買上価格が不当であるから高く買上せよとのことであるが大体政府の方針によつて行つたもので、賃貸価格の五十倍で一戸坪当たり平均百七十円本県等は平均百五十円である。これは全国の各都市に比べていい方だ。いまさら県費で高価に買上げることは出来ない。また資材関係であるが本県で資材が円滑になるのは明年四月からでなければ出来ない。それまでは各自の手持資材を流用していただきたい。然し県としてはこの問題をほつてをく考へではないどこまでも出来ることは御世話する。買上価格など納得のいかない人は遠慮なく私を訪ねて来て下さい。」

（『島根新聞』1945 年 9 月 7 日）

【史料 7】ニュース 「母と子の会」誕生

松江駅発の上り列車が駅の構内を出て三十秒——一分間位経つたかと思われる頃、右の車窓をのぞくと、木造建の二階の出窓にはずらりとオカマに鍋を始めその他の世帯道具を陳列した、さながら何処か病院の病室風の巨大な建物が二棟と、その左側にはこれは又マツチ箱とは良くいった、しかもその半数ばかりは瓦のない素木葺きの家とも小屋とも名づけようのない百軒余りの集団住宅が見えます。これこそ松江市住宅課が終戦後の住宅難に備え、はるばる江津から運んだ島根化学の寄宿舍の生れ変つた姿、東朝日町の市営小浜アパートと同じく宮の沖アパートと住宅は小浜住宅、それに瓦ぶきのこの一角では一番豪華ともいへる中村造船の社宅ですが、この両アパート（一棟五十世帯）と住宅に住む人々はすべて終戦後外地から引揚げて来た人々か、或は戦災疎開者、或は今迄住っていた家の家主が何処からか引揚げて来たため追ひ立てられ逃れるように出て来た人々、一言にしていえばすべて戦争犠牲者とでも名づけらる人々です。去る七月この両アパートと両住宅の有志が発起人となつて「生活を守る会」が結成されましたが、今度はこの同じく両住宅の進歩的なお母さん達が発起人となつて赤ちゃんの健康増進を主目的とする「母と子の会」を結成する相談が纏りました。未だ組織は確立されていませんが、既に日赤今村先生の熱心な指導と中央保健所の保健婦さん達の積極的な協力を得て第三回目の乳児検診を終り、最近はお母さん達の要望に応じてツベルクリン反応、及アパートの一部に百日セキが出ましたので、その予防注射を行つたりして盛んに実際活動をしています。第一回検診の際に一人に付二拾円づゝの金を集めてこれを資金とし、差当り必要な体重計を購いましたし、今度は今村先生発案に依り「赤ちゃん手帳」を作つて検診の都度（大体月一回は医師を呼び、一週一度保健婦さんに巡廻して貰つて検診を行う計画）統計的に体重その他を記載し科学的な赤ちゃんの育て方をしようと張切つています。目下組織を急いでいますが、今度の事業としては唯乳幼児の問題ばかりでなく、産婦に対する回診とか、一般児童に対する紙芝居、幻灯等もこの母と子の会で実施して健全なる娯楽を良い子に与える計画を立てられています、このお母さん達の活動如何によっては、医療機関、衛生施設に恵まれない、ドブと蚊の多いこの松江市の一角も、数年後には見違へるばかりの美しい文化村になるのも夢ではないでしょう。

（「婦人タイムズ」三号、一九四八年九月一日）

【史料8】 希望にふむミシン 戦ひの未亡人と遺児は強し 握るハサミに希望をはさみ
ひとり立つ身の布地を断てば 廻る「ミシン」に心がはずむ…

こゝ松江市南田町の「いさを学園」では十一人の戦争未亡人と四人の遺児達が、洋裁の実習に第二の人生を切り開かうと懸命な精進を続けてゐる、一斉にうなるミシンととつ組む彼女達の眉宇には一瞬緊張の色が閃く、汗ばんだ額をさはやかな初夏の風がさつとなで、隣の保育所ではしやぐ坊やの片言を運ぶ、はたち後家は通せても三十後家は通せぬ——と兎角噂を好むのがうるさい世間の指と口…「靖国の妻」「九段の妻」とうたはれて、ひと様の同情にすがられた未亡人には、いま吹く浮世の木嵐が人一倍見にしみる、けふ一日を生きるため、思はず知らず落ち込む黒の淵にどぎつく咲かす黒の花は、ここの未亡人達には全く縁

なき衆生の別世界であらう…

同園経営の母子寮で自活の三人、市内から通ふ九人の未亡人が、隣の保育所に預けた四人の遺児、三人の先生と一緒に唱へる『遺族の誓ひ』がこゝの庭にひびくのが午前九時
この朝礼後、直ちに作業開始…十五本のミシン針は一針一針彼女達の生活を固めてゆく
十二時昼食…坊やと楽しいひと時を過ごす保育所のなごやかさ
午後一時作業始め…次々とでき上がるワイシャツにジヤンパーに仕上げのアイロンがシユンシユーン音をたてゝ香ばしい匂ひを部屋一杯に漂はす、四時半作業終り…
全員一致の跡かたづけに糸くずが布切れが一個所へ集合する、五時終礼…愛児とともににはやる思ひを我が家に運ぶ—これがこの学園の日課だが、週に二時間づゝ次の実習の裁断法を教はることになってゐる

三月二十五日、晴 いよいよ明日待ちに待った晴の終了式、思へば昨年十一月、遺族援護会の温い心情で入園してから丸四ヶ月、これで私達は洋裁の技術を一通り修得したことになる、私達にとっては唯夢中の四ヶ月だつた、みんな実によく頑張つた、亡き夫のため、愛児のためを思へば辛い苦労も苦労にならない…余りにも幸福ないまの私に満足してよいのだろうか、これ位の腕でひとり立ちできるのだらうか、私はもう少し勉強してみたい(以下略)
(『島根新聞』一九四六年五月二十日)

【史料9】戦火も今は思ひ出の夢 孤児に春恵む 松江市東光学園の四十八名

“お父ちゃん、お母ちゃん？ …しんちやつたの…でも僕一生懸命勉強してきつと立派な人になるヨ…だつてもう少し寝たら学校ゆくんだもの…” ポツンとつぐんだ口もとにちよつとさびしい色が流れる、しかしお姉ちゃんに読んでいただくお鼻にまたすべてを忘れ、カチカチ山の悪狸に淡い義憤を覚えたり兎ちゃんとなつたり、清い童心に描かれた空想の世界へ、スクラム組んだ戦災孤児の夢は楽しく飛んでゆく、東光学園(松江市北田町)に温い生活を送る子供たちの瞳はまた春の訪れとともに明るい —現在本県にある戦災孤児は四十八名で、東光学園、篤志者、緑者などのもとでそれぞれ温い生活を送つてをり、県ではこれら孤児に対し、国民校から大学に至るまでの育英補助を行つてゐる、(以下略)

(『島根新聞』一九四六年二月二十二日)

【史料10】冷い故郷の風 援護対策は掛声ばかり

食糧難と住宅難に悩まされつゝ心細いその日暮しをつゞけてゐる海外引揚者や戦災者になんら厚生援護の手もさし延べられず、つれない浮世の風が吹きまくるばかり…

こゝ松江市南田町の一角、無料宿泊所に気の毒な加藤、船越、伊原三名の世帯がある、このうち朝鮮の元山からの初の引揚者である加藤健郎さんは泌々と引揚民の浮草生活の心境を語つた—

引揚民の苦難 解放の日はいつ

北緯三十八度以北のソ連領内では未だソ連から正式な引揚命令がない、在留者は食糧難を

名目として南下し、それぞれ地域で組織された日本人世話会に加盟し同会の幹部のお世話に甘へて細々と生活してゐる、この世話会の組織は従来の在留民団の役目を果し、民間の外交機関といったもので、困窮者には義援金を醸出したり、収容宿泊所の斡旋、その他生必物資の配給など一切の世話をしてゐる、この世話会の活動によつて北鮮の在留者は餓死や凍死からまぬがれることが出来、死亡率も少なかった、いつまでたつても引揚命令が出ないので、私たちは国境線の警備する官憲を買収するか、さもなくば山岳地帯づたひに国境線を強行脱出して、命からがら内地に引き揚げてきた、

かうして内地に引き揚げてから十日ばかりになるが、引き揚げ上陸地よりも郷土の方が引揚者に対する厚生援護の意識が鈍いやうに思はれてならない、こゝの宿泊所に身を投じてから真つ先にぶつかつたのは食糧の問題であつた、引揚上陸地では五日分の応急食糧として主食と味噌、醤油など調味品の切符を支給されたが、旅中で身寄や知人の家に御厄介になつて消費してしまひ、こゝへ着いた時は早速食糧に困つた、約十日間になるが町内の一般配給以外には二三日前薪を四束特配されただけである、

こゝは二三日で立ち退いてくれと云はれたが、毎日探してゐるが家はおろか空間も見付からない、何か露店商でもやらうと思ふが資本の持合せはなし、生業資金を借りたいがこれらの手続がなかなか面倒で決心を鈍らす、すべてのことがもつと簡単に出来るやうに便宜を図つてもらひたいと思ふ、

しかし国家もいつまでも引揚者や戦災者の救護にかゝつてゐられないだらうから、我等はなるべく早く自力で再生の途を拓かうと決意してゐる、元山の世話会本部の方々はまだ引揚げずにゐる、之らの人が引揚げを終われば一緒に苦勞した人々ばかりで同志会を作つて手を携へ、食糧難や住宅難から解放される開拓団へ入植しやうと思つてゐる、

なほ松江市当局の更生援護対策には要望なり不満の点もあるが、とにかく掛け声ばかりで実行の伴はないと云ふのが我等仲間の与論になつてゐる（『島根新聞』一九四六年八月六日）

【史料 11】 声明

敗戦の深刻な苦境の中から私達は如何に祖国日本を再建すべきかに今日、芸能の道を撰びました。この若き情熱を文化に叩きつけ生命をかけて美しく正しい日本をつくる事は何とやりがひの有る事でせうか。私達は一生懸命ただ力の限りを斯道に尽くす決心であります。幸ひ島耕二先生の直々御指導を得、一同歓喜に充ちて勉強に精進しております。まだまだとても皆様に鑑賞して頂く程の吾々ではありませんが、来る十二、十三、十四日の三日間、みづほ劇場で兎に角第一回発表公演会を待ち色々と御指導を願ふと云ふ意味で皆様と舞台と客席で御逢ひしたいと思ひます。脚本は菊池寛先生作「時の氏神」で演出は島先生にお願いひ申しました。ほんとうに未熟ですが懸命に努力して御批判をまちたいと希つております。よろしく願ひ申し上げます。

みづほ演劇研究所研究生一同

各位

（『島根新聞』1946年1月11日）

【史料12】田所龍一「この街に」

この街に住む以上住みやすい街にしたいと思ふ気持は自分の部屋を自分の気に入るようにしたいと思ふのと同じことである。誤解が有つては困るが、気に入る一とは決して贅沢な意味ではなく、良い、明るい生活が出来るように、といふ意味である。このような社会の実現をめざしてお互が力を協せ努力することが文化運動だと私は思つてゐる。生きてゐる以上、この街で生活してゆく以上この街での文化活動は色々な困難にぶつかつてもやつてゆかなければをさまらない。

自分の住みやすい街に一とは非常に個人的感情から出発してゐるやうであるが、その前には私情に対する内省やきびしい自己批判が行はれ、ほんたうに人々が倖せになつてゆける確信に根ざした責任のあるものであることは云ふまでもない。

まづ家庭が心身を浄化し慰す文化的な第一の場所であつてはならない。家庭を構成する人に個々浸潤してゆくようにしなければ足もとから塗りつくしてゆく完全な文化運動とはいへない。小供にも大人にも呼びかけて良い家をつくり、これが発展して良い社会になる。これが理想であり文化運動の究極の目的だと私は思ふのだ。そのためにはできるだけ多くの人々が色々な考へを持ち寄つてどうすれば楽しい生活が送れるか、肉体は、精神は如何に養ふべきか、勤労即文化とは果して何であるかと云つたことについて話し合ひいちばん合理的な方法を展開してゆくことが必要だ。諸々の文化団体や機関はその音頭とり相談相手である。

この耳の中に大きな固い耳クソが有つて気持が悪く、聞えが悪い。これを何とかして掻取つたらどんなに気持が良いことか、この街の愛着は妙にこんな風なものがある。北山のやまなみと宍道湖との調和が醸し出す箱庭のように可憐な風土、大橋とお城と嫁ヶ島、夕映えの美しい街、まことに恵まれたこの街、だがこんな天与のいたりだけでは我々は倖せになれない。何といはふか自然の美さに相応しい良い生活の創造を希ふ真剣な運動が盛んであつてほしい。

何としても自らの心構えが前提だ。"考へること"が精神文化の第一歩である。自ら考へて行ふ、豊かな個性の発見こそ望ましい。がどうかするとそれは個人的な粹に納まり超然模糊とした雰囲気の中に陥つてしまふ虞れがある。インテリの消極性など云はれたのは案外こんな点が指摘されてのことであつたらしい。

いまは誰もが積極性をもつて立たなければならない時である。この街の人々はきつと仲よく語り合ひ協力して良き生活の建設に進むことの出来る人達である。このことこそ私がこの街にかけの最大の期待であり願望である。私自身も大ほらかな怜りをもつて行列の先頭に立つたいと思つてゐる。この街に大行進の起る日が来ると思ふ。いやいや静かに耳を澄ますともうこの街のどこからか新しい希望の登音が聴こえてくる。自らの向上と関連して固い耳クソをほじくるような楽しさがいっぱい溢れてくる(『山陰文学』創刊号 1946年 11月)

【史料 13】諸兄弟へ 一女青会員

長い封建的世相から解放され、私等女性に自由が与へられて幾月、諸姉の皆様、私達の日常をもふ一度見直ませう。

郡団に村会に青年諸兄の理解の下に発言権を与へられてをりながら比較的意見の発表の少いのが現況でございます。

此の間、或る会合の帰りにバスの中で某村青年団幹部の方ともう一人男の人が話してをられるのが耳に入りました。「今日のあの女の人仲々しっかりしてゐない。あんな女を嫁に貰へばハハハ……」

又或る女子青年会の会合の席上、ある会員の言葉「口惜しいけれど女は家庭に入れば、馬鹿であつて貰ひたい、利巧になつてもらひたくない。これが男の人の欲望だそうな」(馬鹿利巧にもいろいろな意味はあると思ひますが) こふした言葉が繰返される限り、私達の向上の道は開かない。心ある諸兄の皆様よ、私達に発言を求められる前に、男性より見たる女性、そふした見方をもう一度見直していただきたいものでございます。男の人に茶を汲ませ、洗濯をさせるのが男女同権でもなく女代議士さんも家に帰ればよき妻であり嫁であらねばならぬ事は今更申上げる迄ありません。

女性の幸福は男性なくしてはなく、男性と女性が協力してこそ、真の幸福は訪れるもの、青年の純真なる感情意気と感激を以て、高くすぐれた、たくましい知恵のはたらきを充分に發揮して私達に与へられた自由の道を堅実に歩んで行きたいものでございます。

家庭を■さめて行く上に子供の教育上に女性の教育が必要です。教育と申しまして、学問をさすのではなく人格の修練を申上げるのです。世間の皆様の正しい理解のもとに、私達に一層修養機関が与へられますことを切望致して止みません。(了)

(岩坂村青年会文化部編『青年の声』第 6 号、1946 年 11 月 15 日)

【史料 14】青年と文化運動 大庭村青年会長 高島壽郎

文化国家建設の時、青年にあつて文化運動が日増に延びて行く傾向がある事は意義大なるものがあると思う、何んと云つても青年はそれ丈時代感覚に鋭敏であり運動の担い手として多大な期待がかけられている

郡青年団に於ては生活文化展、本村に於ては文化祭と総べて濃厚になつて来ているが、農村文化運動は農民自身の自発的な運動であつて、一方的な智識階級のための運動であつては何の意味も持たぬ、此の点、本村の文化祭は情熱たぎる青年を主体とし、老若男女、村内こぞつて参加すると言つた真に農村の明るい和かな姿！これでなくてはならないと思う

然したら文化は派手なるお祭り騒ぎをやることだと思ふ感があるが決してそうではない、我々青年の占めつゝある立場、今後の役割を自覚して、安っぽい騒ぎに走らず地味であつてコツ／＼／＼と実力を養つて行く必要がある、農村青年にあつてはどこまでも農村問題を対象として行かねばならぬのに反し現在派手な快楽的な方向は頗る活潑であるのに反し、大衆的な生活に根を下し文化運動になりにくい現状は洵に遺憾である、又、殊更に目を引く

様な変体的なる退廃の色を求めて行く非文化運動も進展している事にも注目せねばならない、我々青年の文化運動は飽迄も健全なる生活に立脚せねばならぬ、敗戦以来盛り沢山の課題を担っている我々祖国の将来はかゝつて青年の双肩にある、新しき理想を以って文化運動の為に協力される事を切望する

(八束郡大庭村青年会修養部「大庭青年会々報」昭和二十二年十一月三日)

【史料15】『意宇の流』

・「一卷頭言— “意宇の流れ、創刊に当りて

敗戦と云ふ深刻無残な現実と直面して、今までの国家形態の総べては、脆くも潰へ去つたのである。次に来る可きものは何か…… 今や武力なき国、日本の進む可き道は只一つ、それは自由と平和に盛られた文化の国でなくてはならない。自由と平和の文化国家……それは、純情と燃へる熱意を持つた我々青年の手によつて確立されなければならない。郷土の発展も、国家の再建も総べては青年のその情熱に左右されて行くのである。文化村……模範村……等々の——過去に於ける郷土の名声は余りにも高かった。しかし乍ら……■■■■敗戦後の我が郷土を静かに見つめる時、我々青年の身中を切々としてゆすぶるが如き何ものを、はつきりと意識するのである。

青年よ！行け…。自由と平和を求め、然るにそう道理は、我々青年自らの手で開拓し、創造しなければならない。そして、それは、文化によってのみ、開拓し創造し得るのである。国家の再建も郷土の発展なくして到底望む事は不可能であり、郷土の発展も又青年の自覚なくして、何も望む事は出来ない。我々は文化を通じて、“完全なる人間、への最大なる努力をしなければならない。それによって、郷土の発展、国家の再建を望む事が出来るのである。このたび、本会より創刊せられたる文化誌“意宇の流れ、こそは、我々青年の“完全なる人間、への大いなる指針でなくてはならない。

一号より二号…三号と、回を重ねる度毎に、愈々内容の充実を図り、本誌創刊の趣旨に副はれん事を、希ふ次第であります。 一二一、八、八一」

(『意宇の流』第1号、1946年10月1日)

【史料16】

・12月8日、大和工場に於いて、青雲会主催大和工場後援の「テアトル・ヘルン」による太宰治作「春の枯葉」三幕が上演。当劇団は、松江市に於いて「我が町」「冬の花火」「春の枯葉」を公演した松江文化同好会でその後「テアトル・ヘルン」と改名し再出発し近くは菊田一夫作「墮胎医」を公演し好評を拍して居り当町の木幡弘君もその急先鋒として活躍している「春の枯葉」でも主人公の学校教師に扮し熱演した。…今後もこんな催しがどしどし行われるといいと思います。」(『いさり火』7号、宍道町青年団、1948年12月)